日本図書館情報学会
臨時シンポジウム

情報リテラシー教育の実施は大学図書館員にとって優先事項なのか?

2023年3月4日(土)

井田　浩之(城西大学助教)
hiro-ida@josai.ac.jp

本発表の範囲

1. 大学図書館員の専門性（特に研究・教育支援の側面）について，リテラシー研究，高等教育論など，図書館情報学の周縁にある知見を使いながら検討します。
2. 発表者は，近年図書館情報学に軸を置いてません。最近の事情を反映できていないかもしれません。不備などは質疑でご指摘いただくか，各自のコンテクストに置き換えていただければと思います。
3. 本発表は以下の内容を発展させたものです。
   - 井田浩之 (2021). 大学カリキュラムへの情報リテラシー教育の統合に関するモデルおよび理論『カレントアウェアネス』(350), p. 10-13

アウトライン

1. 情報リテラシーの捉え方
2. 図書館員の専門性とは？
3. カリキュラムをめぐる諸問題
4. パンデミックと研究・教育環境
5. これから図書館（員）はどこに向かうべきなのか？

1. 情報リテラシーの捉え方

情報リテラシーの捉え方：実践知ーフレームワーク化ー検証（評価）

1. 図書館情報学の領域では，フレームワークを通して「情報リテラシー」の概念を拡大・精緻化してきた。
2. 英米圏では，**実践知→フレームワーク化→検証（評価）**。実践に耐えうるものかをめぐって，学術的検討がなされる（小田，2016；井田，2021）。

①ACRL (2015) → *College & Research Libraries*

②SCONUL (2011) →Goldstein (2015)によるレビュー

【定義】情報リテラシーを身につけた人は，情報の収集，使用，管理，統合，倫理的使用方法を把握しており，そのためのスキルを有している人（SCONUL, 2011）

情報リテラシーの捉え方（続）
研究者側からの検証（概念の複雑さ）

1. 現象学的アプローチ＝質的研究を用いて，多様な経験や現象からパターンを抽出する研究 (Boon et al, 2007; Dabengwa et al., 2023)
2. “people in practice” ＝学習者によって学習や情報との関わり方は異なるものだとする捉え方 (Lloyd, 2010など)
3. 教員，図書館員で，情報リテラシーの捉え方の違い (Pinto, 2019)

研究者側からの問い直しも盛んに行われている。
情報リテラシーの概念受容の難しさ。理論と実践の融合＝人の学びの特性の反映方法が鍵。

2. 図書館員の専門性とは？

図書館員の専門性とは？
研究・教育支援の拡大

1. Bronstein (2011)は，非常に複雑・ダイナミックな環境での仕事だと指摘している。
2. Mwaniki (2018) は，デジタル化に伴う，サービスの変化への対応
3. Walter (2008) は図書館の担う教育支援を “teacher identity”としているが，「図書館員が教育的な支援を推進した結果ではなく，組織変化への貢献」に由来する（外的要因）だとしている。
4. Abrizah et al. (2016)は，教員－図書館の連携を対象にした文献レビューから，研究・教育支援への関与が拡大を認めつつも，図書館員の教育方法開発が不十分であると指摘。教育方法の未確立

研究・教育支援は拡大しているが，情報リテラシーの教育方法は創発的（emergent) だとされている。外的要因での専門職とは？

サードスペース理論(third space theory)

1. 大学では，多様なニーズに対応できる専門職の役割を捉える枠組み。背後には，内的要因と社会的要因がある。
2. 例えば，トランジションへの対応，専門職開発（教育センター），経済・社会的なニーズへの対応
3. サードスペースとは：

「専門職と学術活動の間に創発されたスペース」(Whitchurch, 2008, p.378)

- 役割を越境した多様な活躍が期待されている(cross-boundary)
- 管理業務と研究研究活動（支援）の両方のニーズに応えることが期待されている。

サードスペース理論（Whitchurch, 2008を改変）

専門職（事務職）

一般職

管理業務

専門職

ファイナンス
人事関係

特定分野

研究マネジメント

境界で行う業務

スタディスキル

予算，障がい支援

コミュニティや地域連携

サードスペース
例（大学のプロジェクト）

トランジション業務

地域連携プロジェクト

専門職開発

大学教員

境界で行う業務

学生対応

授業，カリキュラム開発（留学生対応）

地域との連携

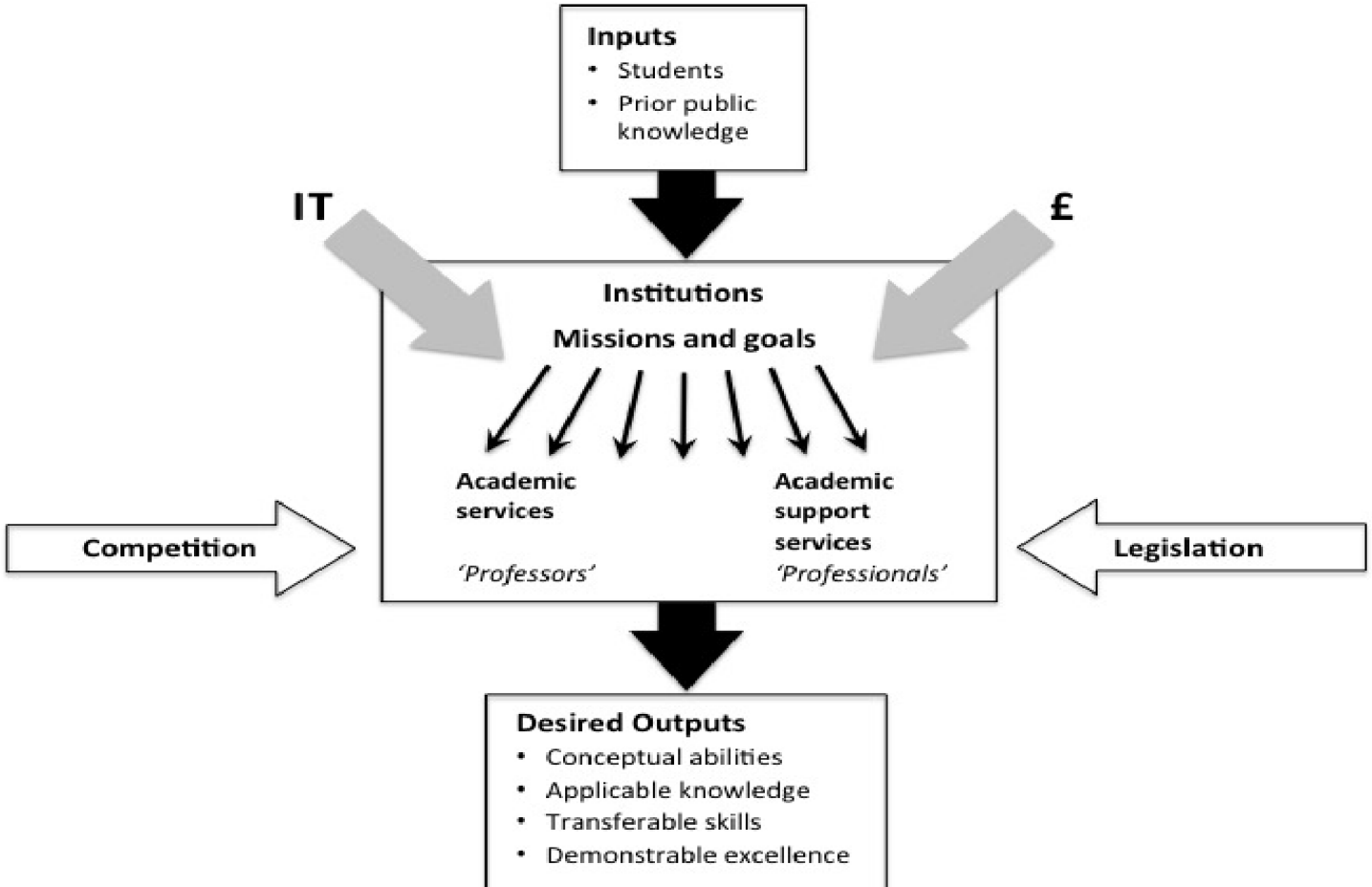
教育

研究

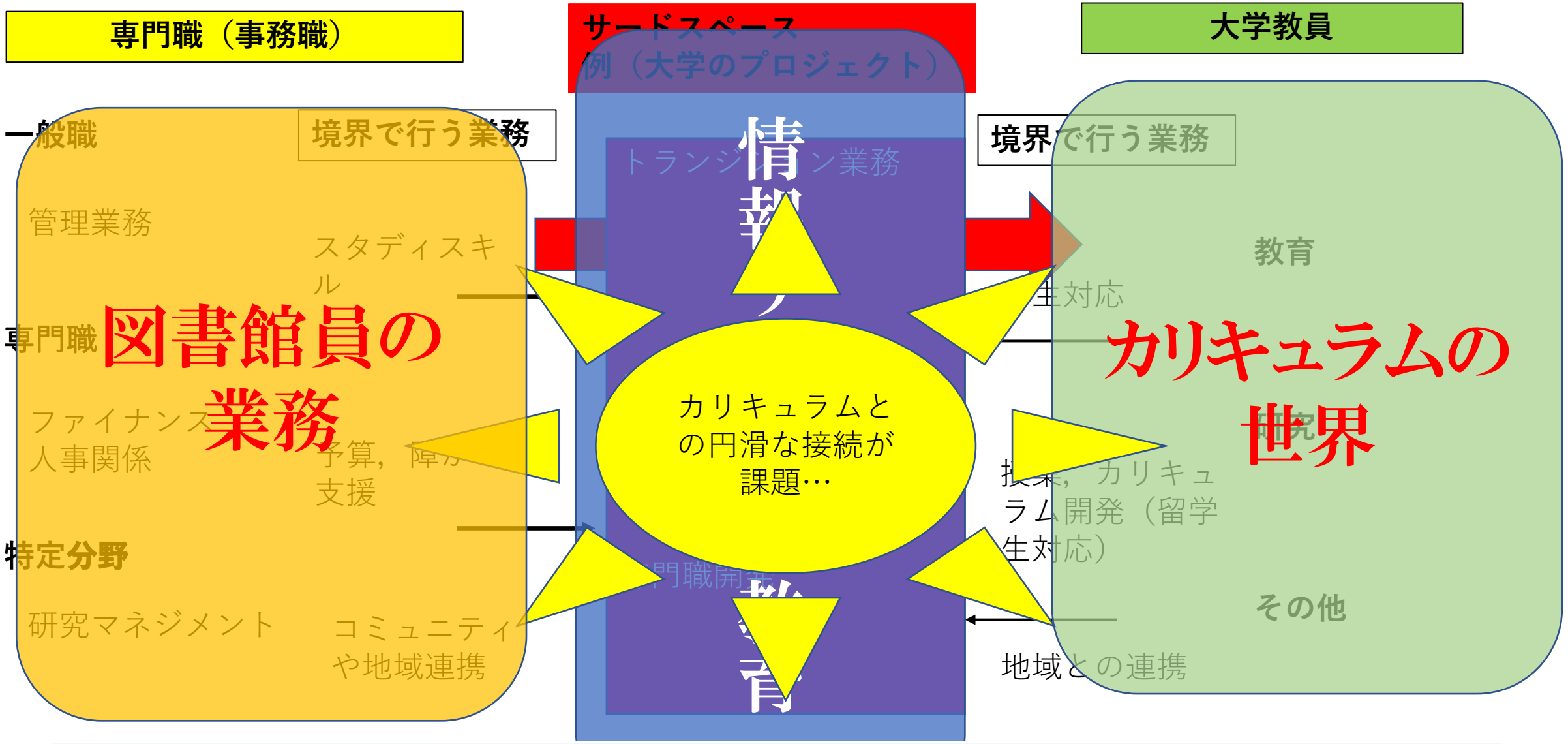
その他

サードスペース理論で図書館員の位置付けを考える

- 古くはIT部門と図書館の融合によって，大学機関の研究を強化する動きがあった（Corrall and Lester, 1996）



情報リテラシーをサードスペース理論で考える



☆情報リテラシー教育は，専門職（図書館員）が大学教員（カリキュラム）に近いところで展開している。

サードスペースでの図書館員

1. Elmborg (2011) では，図書館員と図書館の利用者が協働し，情報について対話をすることから，一般の利用者と図書館のルールの接点を緩和する取り組みが見られる。
2. Cox and Verbaan (2016)では，図書館－IT部門－リサーチ・アドミニストレーターの協働から，利用者との協働を目指す動きがある。
3. サードスペースの理論を図書館員の専門職に応用した議論は十分に進んでいない(私の博士論文)。
4. 日本での「図書館員」は，資格制度に支えられた社会的制度／外部委託で(確かに資質能力に関する議論はあるにしても)その役割を問い返さなくても良い・問い直す余地がないため，議論が停滞しているのでは？

情報リテラシーの実施形態：カリキュラムや教員との「連携」が理想

- 高等教育のカリキュラムに幅広く対応するために，カリキュラムとの連携を目指して，以下のような取り組みがなされている。

場面 Fister and Eland (2008)	連携 Saunders (2011)
初年次教育	コースレベル
学科関連科目（必要に応じて）	プログラムレベル
学部教員とのティームティーチング	全学カリキュラム
[illegible]	キャンパス間
	学位レベル

この「連携」に向けた取り組みが図書館員の専門性となりつつある。しかし，カリキュラム，学問分野の価値観と近づくのは結構大変な業務。境界(boundary)を跨ぐ戦略も必要…

3. カリキュラムを巡る諸問題

情報リテラシーが
カリキュラムと断絶する理由

- 情報リテラシーがカリキュラムと断絶しやすい場面 (Booth et al. 2015)

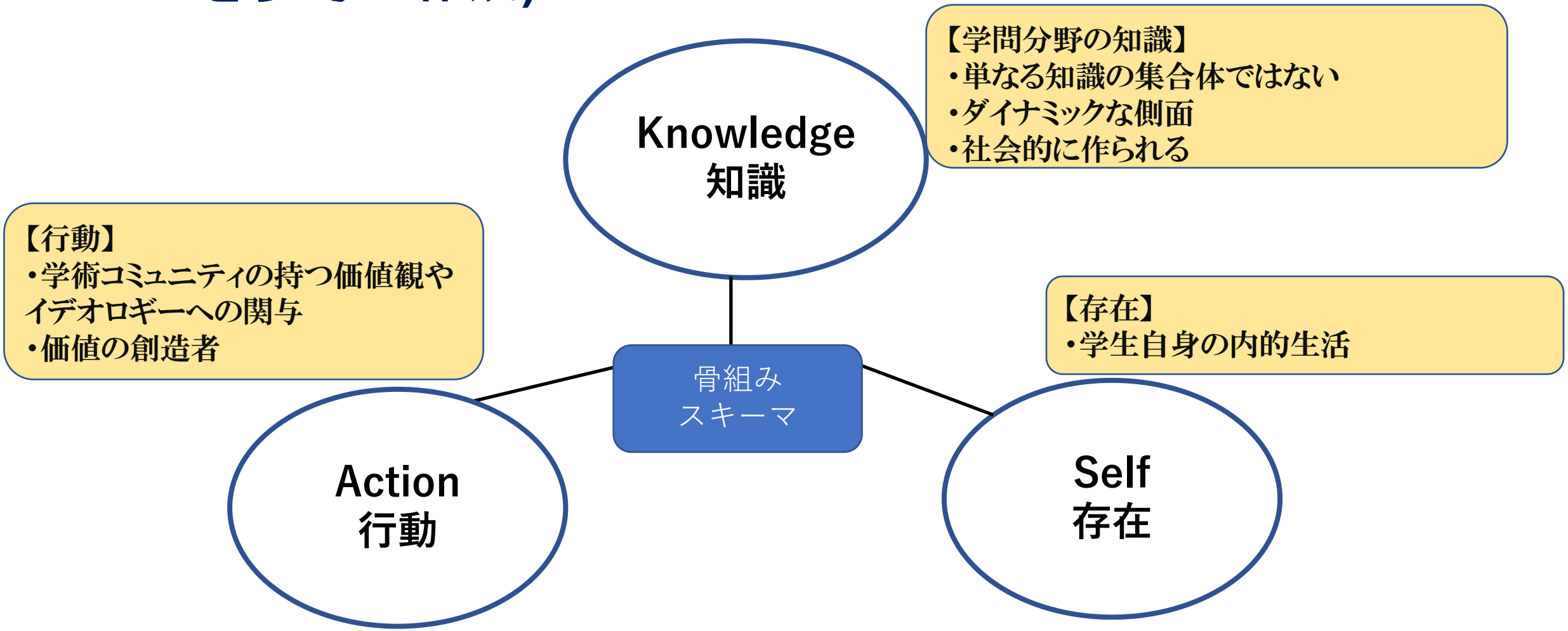
1. 期間限定での指導しか想定していない(1回きり “one-shot” format)
2. 学生のコースワークへの関与できない
3. コースや評価のデザインに反映されない
4. 教員と図書館員の連携が最低限
5. 統一シラバスが準備されている科目の場合，その中に組み込めていない

カリキュラムをめぐる諸問題

1. カリキュラムとの連携は非常に複雑
2. 長澤氏アーラムカレッジでの事例研究（長澤，2012など）
3. リテラシー研究から「スキル教育」への批判 （Lea & Street，1998）
   a. 対象はアカデミック・ライティング教育
   b. **カリキュラムの価値観や教員の指導は状況依存であり，学問分野が持つイデオロギーをどう反映するのか**
4. 認知科学から「…力」育成の困難さ：人間の理解や学びは，想像以上に柔軟かつ状況に応じて振る舞い方が変わる（鈴木，2022）

カリキュラムの中で，情報リテラシーの側面は，どう扱われているのか？
学問分野によって，情報リテラシーの指導配分（重視度合い）は異なるはず。図書館員は，カリキュラムをどうみるのか，カリキュラムを見るための枠組みの必要性。

カリキュラムを捉えるスキーマ (Barnett, Parry and Coate, 2001; Barnett and Coate, 2005を参考に作成)



カリキュラム：日本の現状

1. 日本の場合，カリキュラムポリシー，ディプロマポリシーなどの制定によって，カリキュラムが整備されつつある（中井ほか，2022）。
2. カリキュラムは，社会的で，表層的な記述では捉えられないダイナミックな側面，価値観，イデオロギーを含んでいる。この点を1.にどう反映させているのか？
3. カリキュラム研究，リテラシー研究，認知科学などの知見などを踏まえると，人の情報との関わりは，情報リテラシーのフレームワークで記述されているように単純化できない部分が多い可能性。

4. パンデミックと研究・教育環境

パンデミックと研究・教育

1. 「時間」と「空間」の多様化(石井, 2022)
2. 学びが止まったわけではなく, それぞれのペースで学びが継続し, 遠隔教育やe-learningが**現実化(materialize)**した事実(“There’s no virtual learning”, Gourlay, 2021)

   **大学が空洞化したわけではない

3. 人間(human)とテクノロジ(non-human)の関係が変わった (Gourlay, 2020)
4. **人間の身体の分散化(時間・場所の越境)**と**オンライン授業**の組み合わせ。

人間と人工物（メディア，言語）の関係について

- Pennycook (2018) は人間の主体と人工物の関係を，言語使用の観点から「レパートリー」（領域）という概念で説明している。

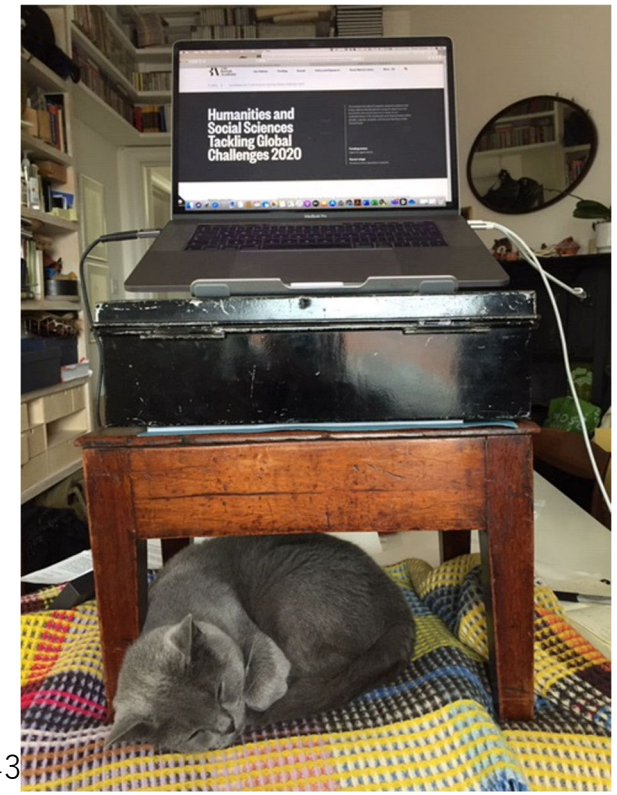
■個人の存在と「空間分布(spatial distribution)，社会的慣習(social practice)，そして人工物の具現化(material embodiment)の観点から理解していく必要がある」

■パンデミックにより，人間の身体は分散化。言語使用を可能にする人工物（メディア）も学習者の世界に埋め込まれ分散され，学習者の日常生活に融合した。

コロナ禍において，学習者の時間的・空間的側面が拡大し，人工物（ここでは，メディア，オンライン授業・教材）との柔軟な組み合わせが可能に。

身体の分散化

- オンライン授業下，教員や学生の身体は分散化した。（写真データ：Gourlay, 2020）



デジタル化への反応

1. 日本ではパンデミックによって，GIGAスクール構想の加速化。初等・中等教育の教室現場では，ICT活用がほぼ必須。

2. 大学でもオンライン授業の導入。

3. “technology resistance”（技術への抵抗，苦手意識）の研究が出てきている。デジタル化の進行が当然視されているが，慎重な立場や疑問を投げかける教員もいる(Teräs et al., 2022)。

□ポストパンデミック時代における，図書館の役割の再考
□テクノロジ推進の状況と教員の多様な認識

5.これから図書館（員）は どこに向かうべきなのか？

残りの話を進める前に

今後，
図書館（員）の強み，存在感は
どこで発揮できるだろうか？

大学のミッションを具現化に向けて：学問分野・授業方法の把握

1. パンデミックを経験しても，学問体系は維持されるし，オンライン授業で学びが衰退した訳ではない。
2. 図書館へのアクセスは制限されても，対面授業で学生がキャンパスに戻ってきており，図書館の利用もコロナ禍前に戻る可能性がある。身体の分散化を経験した学習者が，どういう経験を持ち込んでくるかは要検討。
3. 研究・学習に資する蔵書構成
   - その分野で使用頻度の高い教科書・研究書の把握・整備
   - オープンサイエンスの時代でも，**図書館は選書（評価）を通して，情報の範囲を「制約」し，学習や研究を「支援」する**。この**「制約」は，研究や学習の足場掛け(scaffolding)**になる。
   - **戦略的な選書＋デジタル化を積極的に取り入れる**

図書館への期待(1)：蔵書構成

1. 各分野でよく使われる教科書や概説本は，大学の状況に応じて**戦略的に**揃える。**ニーズ分析。**
2. 「教科書」がどう使用されているか？　オンライン授業で，教材のデジタル化が加速しているが，依然として学問体系を維持するための学術情報は流通している。ただし，**その人工物の使用は状況依存性を有しており，固定されたものではない**（Oliver，2013）。
3. **教員の研究，学問の世界（学生が身を置く現実世界）の知識体系を図書館の中に再現してほしい。やっぱりこれが優先事項なのではないでしょうか？**

図書館への期待(2):情報リテラシー

1. 教育方法を磨く機会を見つける。（→カリキュラムと断絶する理由として，学部・学科，教員の「時間がない」「余裕がない」…裏にある本音）→創発的な教育方法
2. 従来の図書館オリエンテーションなどは，効率よくノウハウを伝達する点で，規模拡大に貢献できる利点。ただ，学問分野に特化したコンテンツの開発。小規模でもいいので，教員・学部・学科と持続可能な連携を構築。
3. 学習センターや全学的な組織との連携をどう考えるか？
4. レポートの書き方，卒論の書き方，プロジェクト研究，授業。教員が何を・どのように指導し，どういう価値観を重視しているか。その語りはどのようなものか。積極的に把握していくことが，プレゼンスを高める可能性。
5. 潜在的なニーズを持つ学生への対応。アクセス経路は多様に，対応は柔軟に。

政策を見据えて

『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』(中央教育審議会)

1. 文理融合教育
2. 出口における質保証(卒業論文・卒業研究)
3. 学生保護の仕組み

■「学び直し」(リスキリング)

→対象の拡大，卒業生や同窓生のネットワーク

図書館が学問の軸となる選書をし，学問体系を意識した蔵書構成，卒業論文・卒業研究などに向けた貢献が考えられる。
ただし，この数年，教員や学生の経験が変わっているのは事実。
この経験をどう把握していくかが今後の課題。

References

- Abrizah, A., Inuwa, S., & Afiqah-Izzati, N. (2016). Systematic Literature Review Informing LIS Professionals on Embedding Librarianship Roles. *The Journal of Academic Librarianship*, *42*(6), 636–643. https://doi.org/10.1016/j.acalib.2016.08.010
- ACRL. (2015). *Framework for information literacy for higher education*. http://www.ala.org/acrl/sites/ala.org.acrl/files/content/issues/infolit/Framework_ILHE.pdf
- Barnett, R., & Coate, K. (2005). *Engaging the Curriculum in Higher Education*. Open University Press.
- Barnett, R., Parry, G., & Coate, K. (2001). Conceptualising Curriculum Change. *Teaching in Higher Education*, *6*(4), 435–449. https://doi.org/10.1080/13562510120078009
- Boon, S., Johnston, B., & Webber, S. (2007). A phenomenographic study of English faculty's conceptions of information literacy. *Journal of Documentation*, *63*(2), 204–228. https://doi.org/10.1108/00220410710737187
- Booth, C., Lowe, M. S., Tagge, N., & Stone, S. M. (2015). Degrees of Impact: Analyzing the Effects of Progressive Librarian Course Collaborations on Student Performance. *College & Research Libraries*, *76*(5), 623–651. https://doi.org/10.5860/crl.76.5.623
- Bronstein, J. (2011). The Role and Work Perceptions of Academic Reference Librarians: A Qualitative Inquiry. *Portal: Libraries and the Academy*, *11*(3), 791–811. https://doi.org/10.1353/pla.2011.0032
- Corrall, S., & Lester, R. (1996). Professors and Professionals; on Changing Bourndaries. In *Working in Higher Education* (pp. 84–100). Open University Press.
- Cox, A. M., & Verbaan, E. (2016). How academic librarians, IT staff, and research administrators perceive and relate to research. *Library & Information Science Research*, *38*(4), 319–326. https://doi.org/10.1016/j.lisr.2016.11.004
- Dabengwa, I. M., Young, S., & Ngulube, P. (2023). Rigour in phenomenological and phenomenography studies: A scoping review of library and information science research. *Library & Information Science Research*, *45*(1), 101219. https://doi.org/10.1016/j.lisr.2022.101219

References2

- Elmborg, J. K. (2011). Libraries as the Spaces Between Us. *Reference & User Services Quarterly*, *50*(4), 338–350. https://doi.org/10.5860/rusq.50n4.338
- Fister, B., & Eland, T. (2008). Curriculum Issues in information literacy instruction. In C. N. Cox & Elizabeth Blakesley Lindsay (Eds.), *Information Literacy Instruction Handbook* (pp. 94–103). ACRL.
- Goldstein, S. (2015). *Perceptions of the SCONUL Seven Pillars of Information Literacy : A Brief Review*.
- Gourlay, L. (2020). Quarantined, Sequestered, Closed: Theorising Academic Bodies Under Covid-19 Lockdown. *Postdigital Science and Education*, *2*(3). https://doi.org/10.1007/s42438-020-00193-6
- Gourlay, L. (2021). There Is No "Virtual Learning": The Materiality of Digital Education. *Journal of New Approaches in Educational Research*, *10*(1), 57–66. https://doi.org/10.7821/naer.2021.1.649
- 井田浩之 (2021). 大学カリキュラムへの情報リテラシー教育の統合に関するモデルおよび理論『カレントアウェアネス』(350), p. 10-13
- 石井英真(2022).教育「変革」政策の展開と教師の自律性―「教育DX×個別最適な学び」による脱学校化の行方―　日本教育方法学会編『教師の自律性と教育方法：教育のデジタル化・協働的な学び・個別最適な学びを解剖する』図書文化社, 10-23.
- Lea, M. R., & Street, B. (1998). Student writing in higher education: An academic literacies approach. *Studies in Higher Education*, *23*(2), 157–172. https://doi.org/10.1080/03075079812331380364
- Lloyd, A. (2010). Framing information literacy as information practice: site ontology and practice theory. *Journal of Documentation*, *66*(2), 245–258. https://doi.org/10.1108/00220411011023643
- Mwaniki, P. W. (2018). Envisioning the future role of librarians: skills, services and information resources. *Library Management*, *39*(1/2), 2–11. https://doi.org/10.1108/LM-01-2017-0001
- 長澤多代(2012)大学教育における教員と図書館員の連携を促すカスタマイズ型の学習支援：アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに『日本図書館情報学会誌』58 (4), 185-201
- 中井俊樹ほか(2022)『カリキュラムの編成』玉川大学出版会
- 小田光宏　(2016). ACRL高等教育のための情報リテラシーの「枠組み」－白熱する議論に向けて－『カレントアウェアネス』(327), p. 24-27.

References3

- Oliver, M. (2013). Learning technology: Theorising the tools we study. *British Journal of Educational Technology*, *44*(1), 31–43. https://doi.org/10.1111/j.1467-8535.2011.01283.x
- Pennycook, A. (2018). Posthumanist Applied Linguistics. *Applied Linguistics*, *39*(4), 445–461. https://doi.org/10.1093/applin/amw016
- Pinto, M. (2019). Exploring attitudes towards information competencies of students and faculty: A disciplinary perspective. *Journal of Librarianship and Information Science*, *51*(1), 260–274. https://doi.org/10.1177/0961000617742444
- Saunders, L. (2011). *Information Literacy as a Student Learning Outcome: The Perspective of Institutional Accreditation*. Libraries Unlimited.
- SCONUL. (2011). *The SCONUL Seven Pillars of Information Literacy: Core Model for Higher Education*. https://doi.org/10.1108/00907320610716486
- 鈴木宏昭 (2022). 『私たちはどう学んでいるのか――創発から見る認知の変化』筑摩書房
- Teräs, H., Teräs, M., & Suoranta, J. (2022). The life and times of university teachers in the era of digitalization: A tragedy. *Learning, Media and Technology*, *47*(4), 572–583. https://doi.org/10.1080/17439884.2022.2048393
- Walter, S. (2008). Librarians as Teachers: A Qualitative Inquiry into Professional Identity. *College & Research Libraries*, *69*(1), 51–71. https://doi.org/10.5860/crl.69.1.51
- Whitchurch, C. (2008). Shifting identities and blurring boundaries: The emergence of third space professionals in UK higher education. *Higher Education Quarterly*, *62*(4), 377–396. https://doi.org/10.1111/j.1468-2273.2008.00387.x

ご清聴ありがとうございました。